温故知新メディア散歩

碩学の複眼的視点

― 宮崎市定『中国史』―

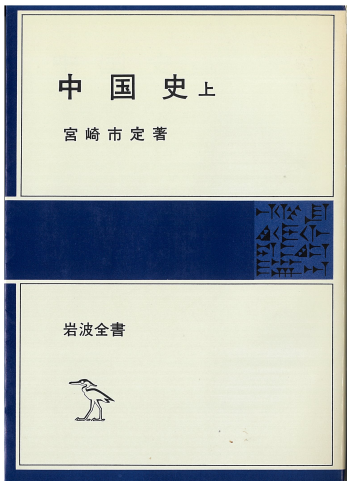
全集はT・S・エリオット、ヴィリエド・リラダン、オスカー・ワイルドと持っていたが、学者の全集を揃えたのは中国史家宮崎市定教授（以下宮崎）だけだった。内藤湖南の京大東洋史学燈につらなる東洋史学者は碩学で、信州人らしい一徹者。東洋史のみならず、日本史から時事エッセイまで広く読み漁った。（菊地実）

通史は平凡？

この大碩学著作なら初期『雍正帝』（岩波新書）か晩年『論語の新研究』を挙げるべきかもしれない。今回あえて通史を選んだのは、冒頭の序総論に「歴史とは何か」「時代区分論」がまとめられていることによる**＜図表＞**。元来通史は教科書的で史実羅列が続き、面白くない。例えば貝塚茂樹『中国の歴史』（全三巻・岩波新書）は中国史概略を知るにはうってつけだが、何か物足りなさを感じた。小著でも新潟大学教授植村清二『万里の長城』（中公文庫初版1944年）は、中原と北方騎馬民族との対立を雄渾な文体で描き、魅了された。同じく松田壽男先生の東西文化交渉を軸とした『アジアの歴史』（NHK出版）も面白かった。歴史観や文体の重要性が分かる。

「歴史とは何か」

私の世代だとE・H・カー『歴史とは何か』（岩波新書）が有名である。宮崎は「①歴史は客観的学問②時間の評価が大切③事実の論理の学問④世界史の部分的研究は現実に進行する世界情勢の管理⑤どのように社会・人生に役立てるか」（1-23頁要約）とし、「私は必然的に文化一元論の立場に立つ」（4頁）と西アジアを重視。「さらに純粋な中立性を保つためには、なるべく実際の政治に参加せぬ方が適当」（25頁）と喝破。これは戦前・戦中「皇国史観」、戦後の歴研に代表されるマルクス主義史学の不毛さをふまえた発言である。私の学生時代でも、日本史教授は明治が封建革命とか無駄な論議をやっていた。



＜岩波全書＞

鋭い解釈

「中国古代は他の世界同様、求心力が強く働き、中世に入ると遠心力が働いて」おり、漢・唐を一体化する見方を否定している（53-54頁）。「政治の良否が経済の景気の波と一致する傾向がある」（78頁）とし、その事例として北宋初期を挙げている。

無論、史実の率直な指摘も魅力だ。「大専制君主

だった始皇帝は・・・甚だ勤勉で、毎日決済する竹簡の文書を十斤を単位として計量し、ノルマを定めた」(156頁)すごい人だ！

三世紀『三国志』についても「その国力は決して同等ではない。魏は九州、呉は四州、蜀は一州・・・口数・人口からすると三国の実力は六、二、一」(232-33頁要約)。

随・唐の本質は「北周以来の武川鎮軍閥の団結」(278頁)で、理想とされる唐太宗「貞観の治」も北朝的色彩が濃い。

最後の分裂国家になった五代時代「従来パミール高原を境として、アジアを東西に分かつとき、西アジア諸国の文化・経済は概して東アジアより優勢で、したがって文物の流れは西から東へ向かっていた・・・唐末五代から・・・生産も西方を凌駕する・・・このことが契丹の興隆を産んだ」(298頁)。

人物評も抜群に面白い。「時代と共に孔子の教えに対する解釈が変遷するが、それは為政者の便宜のために孔子を利用しようとしたからである・・・いつも人民を抑圧する結果になる」(112頁)「書経や春秋と孔子の関係は怪しい」(115頁)とまで言い切る。

中国史上評判最悪の隋煬帝を「誇張があり、北朝斎。南朝斎の諸君主と比べれば、それほど昏愚(こんぐ)とは思われない・・・東西の大河川を南北に連絡したことは後世に残した恩恵は大きい」(270頁要約)としている。確かに役立たずだった万里の長城より、大運河の方が便益ははるかに大きい。

＜図表＞本書の構成

【上巻】

序総論　(歴史とは何か;時代区分論;古代とは何か;中世とは何か;近世とは何か;最近世とは何か)

第1篇　古代史 (三代;都市国家の時代;戦国時代;秦;前漢;後漢)

第2篇　中世史 (三国;晋;南北朝;唐;五代)

【下巻】

第3篇　近世史 (北宋・遼;南宋・金;元;明;清)

第4篇　最近世史 (中華民国;国民政府;中華人民共和国)

＜本書より＞

岩波全書

岩波書店といえば文庫・新書となるが、全書は大学生教科書を対象とした専門書。今の時点で見ると相当難しい本が多い。日本史はマルクス主義歴史家が多いものの、仏教(中村元・東大教授)、関数論(吉田洋一・立大教授)と第一人者執筆が目立つ。考えてみると岩波書店は＜進歩的文化人＞雑誌『世界』。朝日新聞も左巻きと言われるが、宮崎市定全集は岩波書店発行で多くの随筆も岩波・朝日・中公から出されている。それだけ宮崎ファンが多かった証拠であろう。

素晴らしいのは中国史だけでなく、日本史や時々エッセイさらに手広い文筆活動である。今回紹介しないが、太閤論(晩年の秀吉を薄汚い爺)とか胸のすくような明治維新論もある。またエッセイも松本高校時代の京都修学旅行、フランス留学と興趣に尽きない。

■筆者/　宮崎市定(みやざき・いちさだ)、1901(明治三十四)年長野県飯山生まれ。1925年京都帝国大学文学部史学科卒業。三高教授を経て1944年京都大学文学部教授、1965年退官、名誉教授、1989年文化功労者。1995年没。著書『雍正帝』『科挙』『中国文明論集』『論語の新研究』他、多数。

■書誌/　1977年岩波書店発行、岩波全書、上下巻、小B6・302頁